

Kyorin Heartbeat

杏林医学部メールマガジン



2025年度新入生(56期生)のオリエンテーション終了時の集合写真(講義棟A 1階ラーニングコモンズにて)

令和7年度入学式	2
岸本暢将准教授がGRAPPAのSteering Committeeメンバーに就任	4
さまざまなキャリアの先達から学ぶ	
病理学教室 市村幸一特任教授(11)「Esther」	5
高齢医学教室 神崎恒一教授「老年医学の世界」	7
2024年度医学部優秀賞・医学部賞・医学部研究優秀賞表彰式行われる	8
2024年度「杏林医学会 学生リサーチ賞」に4人の学生が選ばれる	10
M4 佐久間さん、岡田さんの研究がAPPW2025で受賞	11
M4 佐野さん、M6 金田さんが外科学会でポスター発表	12
2025年度 新入生オリエンテーション	13

令和 7 年度 入学式



令和 7 年度入学式が 4 月 6 日、松田進勇記念アリーナで午前と午後の 2 回に分けて行われました。今年度の新入生は、医学部 118 名、保健学部 827 名、総合政策学部 263 名（うち編入・転入学 12 名）、外国語学部 275 名（うち編入・転入学 12 名）、医学研究科 6 名、保健学研究科 40 名、国際協力研究科 12 名の、計 1,541 名です。

式典では、初めに渡邊卓学長が式辞を述べました。杏林大学の名称が中国の故事に由来していることを説明した後、「さまざまな問題や困難に直面したとき、状況を冷静に分析し、自らの力で解決への道筋を見出す力を在学中にぜひ養ってほしい。そのために、勉学だけでなく、さまざまなことに挑戦し、世の中を正しく見通す力を身につけてください」と述べました。

式辞に立った松田剛明学園長・理事長は、「勉学はもちろん、課外活動にも積極的に参加し、協調性や他者を思いやる心を育てほしい。この世界に存在する常識という枠を超え、皆さんにしか思いつかない新しい世界を創り出してください。そして、狭い国にとどまらず、広い視野で世界を見て、何事にも挑戦してほしい」と新入生を励ましました。

続いて、医学部 4 年生の岡田直樹さんが、在学生を代表して新入生に向けて歓迎の言葉を送りました。歓迎の言葉を受け、新入生代表の保健学部の船津あいかさんが宣誓を行いました。このあと、人事課職員 小山翔吾さんによる「栄光の架橋」の独唱、ピアニスト曲田絵里さんの「ノクターン Op.9-2」が演奏され、式典を和ませました。式の最後には、吹奏楽部が本学のオリジナル行進曲「アプリコットマーチ」を演奏し、入学式は終了しました。

M4 岡田君の歓迎の辞では、在校生から新入生への気持ちと先輩として誇りが、素直に語られていました。入学式に参加できない在校生にも共有したいと思い、彼から原稿を拝借しましたので、掲載させていただきます。（平形明人）

歓迎の辞

寒い日が過ぎ、ここ三鷹にも新しい春が訪れました。新入生の皆様、この度はご入学誠にありがとうございます。杏林大学の一員と成られたことを、在校生を代表し、心よりお祝い申し上げます。また、ご列席の保護者の皆様方におかれましても、重ねてお祝い申し上げます。本日このように、新入生の皆様をお迎えできることを、在校生一同心待ちにしておりました。



歓迎の言葉を述べる岡田直樹さん

新入生の皆さんは、今日から始まる生活に大きな期待を寄せると同時に、同じくらい大きな不安や戸惑いを抱えていることと思います。しかし、心配は要りません。大学というところは皆さんが想像している以上に楽しく、魅力的なところです。授業や部活動などを通して多くの人と出会い、様々な体験をする機会は今までよりも大きく増えると思います。ぜひ、このチャンスを逃す事無く、学生生活を充実したものにしてください。

しかし、困難に直面することもあると思います。勉強面では質、量ともに高校までとは比べ物にならず、部活動や生活面でも分からないことばかりで、壁を感じることもあるでしょう。私自身、試験や課題、学生会に部活動、アルバイトと様々なものに追われ、何のために頑張るのか、分からなくなったこともありました。それでもこうして今まで進んでこられたのは、同じように壁にぶつかり、乗り越え、欲しい未来を掴もうともがく仲間達が隣にいたからです。足が止まりそうになった時、一緒に行こう、と肩を叩いてくれる仲間に、ここで出会えたからです。

杏林大学には、キラキラと輝く人、輝こうと闘い続ける人がたくさんいます。それは、私の周りだけでなく、皆さんの周りでも同じです。選ぶ未来は違うものでも、それぞれの夢を胸に、ともに四年間、あるいは六年間を駆け抜けた先で、あれが私の仲間なんだと自慢し合えるような人が、今、皆さんの隣に座っています。

最後になりますが、これから始まる生活が、皆様方の可能性が花開く有意義な時間となることを祈念し、歓迎の言葉とさせていただきます。

いつか皆さんが、今日、私の話を聞いたことを自慢できるよう、私も挑み続けます。

一緒に輝き続けましょう。

令和七年四月六日

在校生代表

医学部四年 岡田 直樹

岸本暢将准教授が GRAPPA (乾癬・乾癬性関節炎評価・研究学会) の Steering Committee メンバー (運営委員会委員) に就任



本年 3 月 31 日に行われた GRAPPA (乾癬・乾癬性関節炎評価・研究学会) の Steering Committee (運営委員) 選挙において、本学医学部腎臓・リウマチ膠原病内科学教室 岸本暢将准教授が委員に選出され、就任しました。GRAPPA は乾癬、乾癬性関節炎のエキスパートの学会で世界 5 大陸 1500 名以上の専門医が所属し、診断 (分類) 基準や治療ガイドラインなどを発表しています。

岸本准教授は同時に、日本リウマチ学会の次世代リウマチ医の研究を推進するために組織された研究推進委員会 J-STAR の臨床研究分野の委員長 (新任) にも就任しています。「今後、微力ながらリウマチ膠原病学のさらなる発展のために尽くしていきたい」と語っています。

GRAPPA
Governing Research and Assessment of Psoriasis and Psoriatic Arthritis

2025 ELECTION CANDIDATES
Voting Open March 10 - March 31

GRAPPA Steering Committee
6 Positions Available / 12 Candidates

Maria-Antonietta D'Agostino Catholic University of Rome, Italy	George Fragoulis Laiko Hospital, Athens, Greece	Brian Kirby St Vincent's University Hospital, Dublin, Ireland	Mitsumasa (Mitch) Kishimoto Kyorin University School of Medicine, Japan
Ajesh Maharaj Nelson Mandela Academic Hospital & Walter Sisulu University, South Africa	Ashish Mathew Christian Medical College Hospital, Vellore, India	Natalia Palmou Hospital Universitario Marques De Valdecilla, Spain	Stephen R Pennington University College Dublin - Conway Institute, Ireland
Lourdes Perez Chada Harvard Medical School, USA	Valentin Sebastian Schäfer University Hospital Bonn, Germany	Enrique Soriano University Hospital Italiano de Buenos Aires, Argentina	Marjin Vis Erasmus MC Rotterdam, Netherlands

grappanetwork.org

今回の GRAPPA Steering Committee 選挙 候補者ポスター。
岸本准教授を含めて 6 人が選出された

さまざまなキャリアの先達から学ぶ

11, Esther

略歴：東京医科歯科大学医学部卒業。同大学医学部付属病院脳神経外科で研修後、スウェーデンに留学。カロリンスカ研究所大学院腫瘍病理研究科修了（医学博士）。スウェーデン ルードヴィク癌研究所ストックホルム支部 Postdoctoral fellow、英国ケンブリッジ大学病理学部 上級研究員、英国ケンブリッジ大学病理学部分子病理科 主任研究員、国立がん研究センター研究所 脳腫瘍連携研究分野 分野長などを務める。2024 年 4 月杏林大学着任。



市村 幸一 いちむら こういち
病理学教室 特任教授

ドイツからの大学院生

年が明けて 1992 年の 1 月、ドイツから Esther Schmidt という新しい大学院生が来ました。Esther（エステルと呼んでいました）はフランス・スイス国境に近いドイツ南西の端に近い Steinen（シュタイネン）という小さな村の出身で、スイスとの国境にあるコンスタンツ大学を卒業して私の研究室にやって来ました。大学院（PhD）を探してあちこちに山ほど手紙を書いたところ、唯一「来てもいいよ」と返事をくれたのが Peter だったそうです。しかしそれは私が来る前の 1991 年 8 月ごろのこのように、しかもその頃は私すらおらず研究室もない状態だったので、どうして大学院生を受け入れようという気になったのか理解に苦しみますが、私を受け入れたのと同様、何とかなる（またはどうとでもなる）と楽観視していたのだと思います。

Esther は卒論にあたる研究をアメリカの Cold Spring Harbor 研究所で行ったので、そちらで学位を取るという選択肢もあったのですが、アメリカの文化になじめないと言ってヨーロッパに戻ってくることを選択したようです（アメフトを見ながら宅配ピザを手でつまんで食べる生活はごめんだと言っていました）。Esther は理学部を卒業したばかりだったため、脳腫瘍のことも分子生物学的な実験のことも全く知らず、DNA 抽出やサザンブロッティング、アイソトープの扱い方まですべて私が教えました。



ヨテボリに来て間もない Esther と郊外を散歩したときの写真（筆者 32 歳、Esther 24 歳）

初めての友人

Esther は明るい性格でおしゃべりだったため、同じくおしゃべりな私とすぐに意気投合し、私たちは仲の良い友人になりました。ドイツ人ですが英語は非常に流暢で、私の英語は彼女と話している間に身についたと言っても過言ではありません。私が研究を教え、Esther からは英語を学んだ、という関係でした。

Esther は当時の私にとって初めてのほぼ同年代（と言っても Esther が 7 歳年下でしたが）の友人であり、

仕事のことだけではなく日々の暮らしのことや日本、ドイツとスウェーデンの文化のことなど、およそすべてのことを話し合える相手になりました。当時ヨーロッパにいくつ国があるかもよく知らず、ましてそれぞれの国の文化や考え方の違いなどは想像もつかなかった私にとって、Esther から聞かされるドイツの生活や、スウェーデンとの比較（Esther はドイツを社会的に最も進んだ国と考えており、日本人から見ると社会保障の先進国であるスウェーデンに対しては概して批判的でした）などの話は文字通り異国の話を聞くようで、いつも新鮮な驚きにあふれていました。例えば Esther が言うには、スウェーデンはほぼすべての夫婦が（といっても事実婚が 50% ですが）共働きですが、Esther によればそれは収入が低いので共働きをせざるを得ないのであり、ドイツでは専業主婦には手厚い補助が出るので働くか働かないかの選択が可能である（つまり優れている）、といった具合です。

Esther の実家に招かれる

これは翌年のことになりますが、私は休暇で Esther のドイツの実家に招かれ、1 週間ほど滞在する機会がありました。お父さんは学校の先生で、技術や体育を教えていたようです。お母さんは専業主婦で、日本人の味覚に完全にマッチする素晴らしいお料理を作ってくれました。美味しいと感じる食事は世界中どこでも共通なのだと改めて感じました。Esther は 4 人兄弟の長女で、兄と妹、弟がいました。お兄さんはすでに子供が 4 人もいて、子だくさんの家系のような感じでした。最も驚いたのは、Esther の実家の家はお父さんがほぼ一人で建築したものだったことです。基礎工事から柱を立てたり屋根をふいたり窓をつけたりと、日本ならプロの建築業者しかしないことを、ほぼ自分でやったようでした。おまけに同じ家の階下には、友人のスロベニア人夫婦を賃貸で住まわせられるほど大きな家でした。こういったことがかなり特殊な例であることは後でわかりましたが、当時は自立してなんでも自分でできるドイツ人の凄さ、外国人同士が共存して助け合いながら生活をするヨーロッパ人の強靱さには圧倒され、畏怖すら覚えたほどでした。



Esther のお父さんが建てた家。二階建て、バルコニー付きの立派な二世帯一戸建てだった。



Esther の実家の猫。生活の一部としての猫を見たのは初めてで、のちに自分で猫を飼うきっかけとなった。

クリスチャン

Esther という名前は旧約聖書のエステル記にちなんでいます。エステルはペルシャ王クセルクセス 1 世のお妃になり、ユダヤ人を滅亡から救った人物として記載されています（実在したかどうかはよくわからないようですが）。その名の通り、Esther も彼女の家族も非常に信心深いクリスチャンでした（こういった人たちは実はヨーロッパでも稀です）。彼らは長老派教会に属し、司教を持たずに年長者が他の信徒を指導するという、自治独立を旨とするプロテスタントの一宗派です。彼らは聖書第一主義であり、聖書のみを信仰と人生の拠り所としています。このことはのちに私に大きな衝撃を与えることになります。



Steinen の教会（衆会所）の前で Esther の家族とともに。

— 以下次号 —

さまざまなキャリアの先達から学ぶ

老年医学の世界

高齡医学教室 教授 神崎 恒一

こうざき こういち



【略歴】

1986年 東京大学医学部医学科卒業
 1988年 東京大学医学部老年病学教室入局
 1997年～2001年 米国（シアトル）ワシントン大学
 医学部病理学教室に留学
 2002年 東京大学医学部附属病院老年病科講師・病棟医長
 2005年 杏林大学医学部高齡医学准教授
 2010年 杏林大学医学部高齡医学教授
 2012年 杏林大学医学部附属病院もの忘れセンター
 （東京都北多摩南部医療圏認知症疾患医療センター）長（兼任）
 2023年 日本老年医学会理事長

【専門領域】

老年医学、認知症、動脈硬化研究
 【所属学会】
 日本老年医学会、日本認知症学会、
 日本動脈硬化学会、日本内科学会ほか

【現在の主な活動】

三鷹市認知症地域支援ネットワーク会議議長、
 三鷹市在宅医療・介護連携推進協議会委員、
 三鷹市健康福祉審議会委員ほか

高齡医学の神崎です。私は、大学を卒業して以来ずっと老年医学の分野で活動を続け、2023年から日本老年医学会学理事長という栄誉ある立場を務めております。日本老年医学会は、「高齡者の体と心の健康を維持」するために、また「病気と上手に付き合っていくためにどうすればよいか」を考え、それを社会のなかで実現するための方策を提案している団体です。参考ホームページ <https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/proposal/index.html>

「高齡者の体と心の健康を維持」する上で私たちは「フレイル」という概念を社会に広めてきました。フレイルな方々が心身の機能を衰えさせないためにわれわれは何をすればよいのかについて考えています。

また、「病気と上手に付き合っていくためにどうすればよいか」ですが、歳をとって様々な病気を抱えることはやむを得ないことです。病気があっても必要最小限の薬を使って、老いに対する心配と不安をできるだけ払拭できるよう、ご本人と一緒に考えていくことができれば、きっとその方の幸せ（QOL といういい方でもよい）に貢献できると思います。私たち老年科医は高齡者の病気を診るというより、病気を抱えている高齡者を医療面から支援する、そのような立場で診療をしています。

是非、日本老年医学会のホームページ、「老年科医になろう」<https://www.jpn-geriat-soc.or.jp/rounenkai/index.html> をご覧ください。



認知症の理解と予防

～家族と地域のサポート～

医学部教授
神崎 恒一



神崎教授による
動画で市民講座

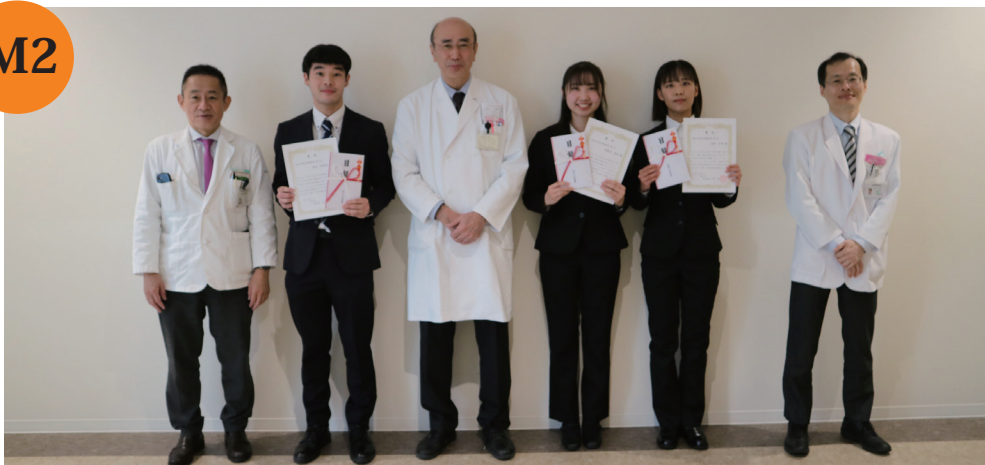


2024年度 医学部優秀賞・医学部賞・医学部研究優秀賞表彰式行われる

2024年度「医学部優秀賞」「医学部賞」「医学部研究優秀賞」の表彰式が2025年4月1日に行われました。表彰式は各学年のオリエンテーションに先立ち行われ、表彰者は同級生の前で平形学部長から賞状を受け取りました。表彰者の皆さんを紹介します。(学年は2025年度のもの)

	M2	M3	M4	M5	M6
医学部優秀賞（1位） 杏林大学成績優秀学生	後藤田理奈	新川萌々	岩田有莉奈	西原明音	武井悠馬
医学部優秀賞（2位）	柏原知歩	星野文	土井こころ	飯塚悠太	梶原雅史
医学部優秀賞（3位）	西田歩央玖	森本経乃	鈴木双葉	李英美	
医学部賞 杏林大学特別表彰学生	森田息吹（M4）	廣瀬元美（M5）			
医学部賞 【団体】 （氏名は代表者）	執行委員会 岡田直樹（M4）	杏林祭実行委員会 小林未歩（M4）	柔道部 岡野兼土（M4）	バスケットボール部 大田健太郎（M4） 佐々木彩葉（M4）	フットサル部 増田貴之（M4） 管真央（M4）
	キャンパス美化委員会 堀透真（M5）				
奨励賞 （医学部研究優秀賞）	新川萌々（M3）	金子拓矢（M5）	濱田知宏（M6）		

M2



左から渡邊学生部長、西田歩央玖さん、平形学部長、後藤田理奈さん、柏原知歩さん、柴原教務部長

M3



左から渡邊学生部長、平形学部長、新川萌々さん、森本経乃さん、星野文さん、柴原教務部長

M4



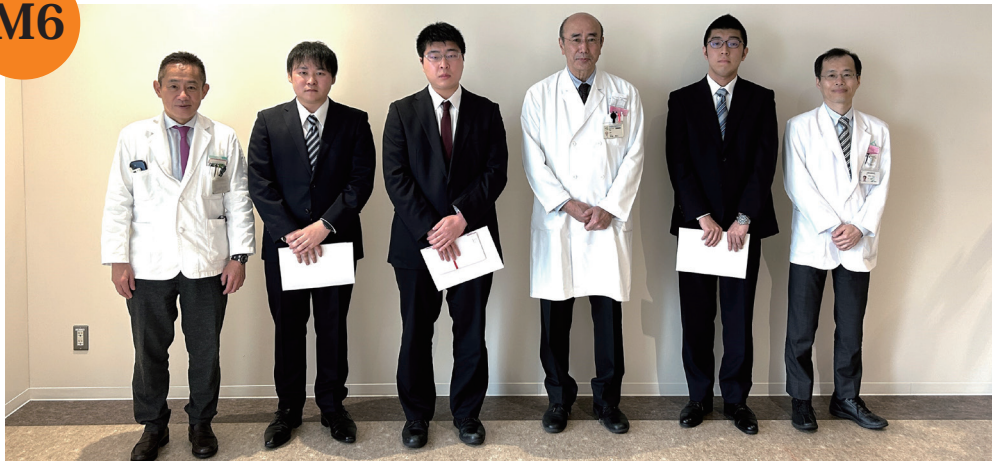
前列左から渡邊学生部長、森田息吹さん、土井ころろさん、平形学部長、岩田有莉奈さん、鈴木双葉さん、柴原教務部長
後列左から岡野兼土さん、佐々木彩葉さん、大田健太郎さん、岡田直樹さん、小林未歩さん、増田貴之さん、管真央さん

M5



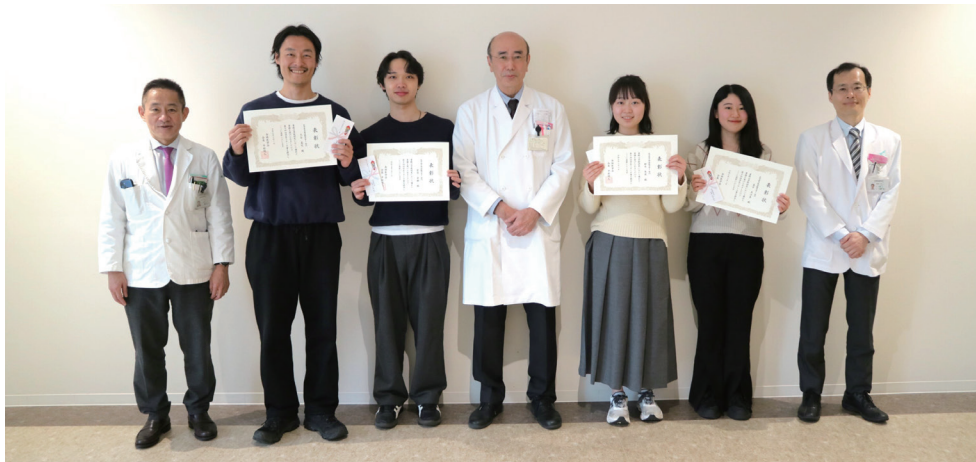
左から堀透真さん、金子拓矢さん、廣瀬元美さん、平形学部長、西原明音さん、飯塚悠太さん、李英美さん

M6



左から渡邊学生部長、梶原雅史さん、武井悠馬さん、平形学部長、濱田知宏さん、柴原教務部長

2024年度「杏林医学会 学生リサーチ賞」に4人の学生が選ばれる



左から渡邊学生部長、大谷真史さん、望月幸樹さん、平形医学部長、鈴木朱実さん、善方美沙季さん、柴原教務部長

杏林大学医学部ではアクティブラーニングに力をいれており、そのプログラムのひとつに早期体験学習があります。早期体験学習は、病院体験学習、体験学習入門、患者体験学習から構成されています。

2024年度の医学部1年生の体験学習入門では、「ハンセン病を対象とした思考練習」をテーマに、国立ハンセン病資料館や国立療養所多磨全生園でフィールドワークを行ったり、国立療養所多磨全生園の名誉園長である石井則久先生や山内きみ江さんのお話を伺ったりしました。そして、これらの活動と並行して、チームを編成し、コンセプトマップを用いて思考を深めていきました。コンセプトマップとは、設定した問題を中心に関連のある知識や概念を書き込み、それらのつながりの意味を考えるための思考ツールです。

こうした思考の過程ならびにその結果についてのプレゼンテーションで、学生の相互評価ならびに教員評価で高い評価を得たチーム（大谷真史さん、鈴木朱実さん、望月幸樹さん、善方美沙季さん：発表テーマ「文学・芸術から読み解くハンセン病」）が、杏林医学会学生リサーチ賞を受賞しました。リサーチ賞を受賞したチームは、ハンセン病患者の方が残した文学・芸術作品から「周囲から向けられる同情への抵抗」というメッセージを読み解き、学生自身の態度変容の必要性について説得的に論じました。

学生たちが思考の際に作成したコンセプトマップは、右の2次元コードからご参照ください。



リサーチ賞の表彰式は4月2日に行われました。表彰状を授与した平形明人医学部長は、「ハンセン病当事者による作品と向き合い、『同情への抵抗』というメッセージを受け止めながら、自らの姿勢を模索したことは、今後の医療実践にも必ず役立つでしょう。これからも研究や社会的活動などに積極的に取り組んでください」と奨励しました。



M4 佐久間さん、岡田さんの研究が APPW2025 で受賞



岡田直樹さんと佐久間光優さん

2025 年 3 月 17 日～ 19 日に幕張メッセ (千葉) で開催された APPW2025 (第 130 回日本解剖学会・第 102 回日本生理学会・第 98 回日本薬理学会 合同大会) において、医学部 3 年生 (当時) の佐久間光優さん、岡田直樹さんの発表が、Undergraduate Poster Award を受賞しました。タイトルは、「A case of a duplicated inferior vena cava with other venous anomalies, discovered in the gross anatomy lab: 解剖実習中に見つかった重複下大静脈と右腎静脈に合流する右卵巢静脈を併発する一例 (代表発表者: 佐久間光優)」です。

杏林大学では、2021 年度より医用画像と解剖学実習の統合教育を開始しました。解剖実習体の全身 CT/ 脳 MRI 画像を学生に配布し、健常人の画像と比較して異常所見を探し、画像所見と肉眼解剖所見を対比させ、発表する、という課題をアクティブラーニング形式で行っています。

本発表は、2023 年度解剖実習中に遭遇した重複下大静脈症例を、解剖実習のアクティブラーニング課題として発表した内容に基づいて、大石篤郎講師の指導のもとで学会発表したものです。

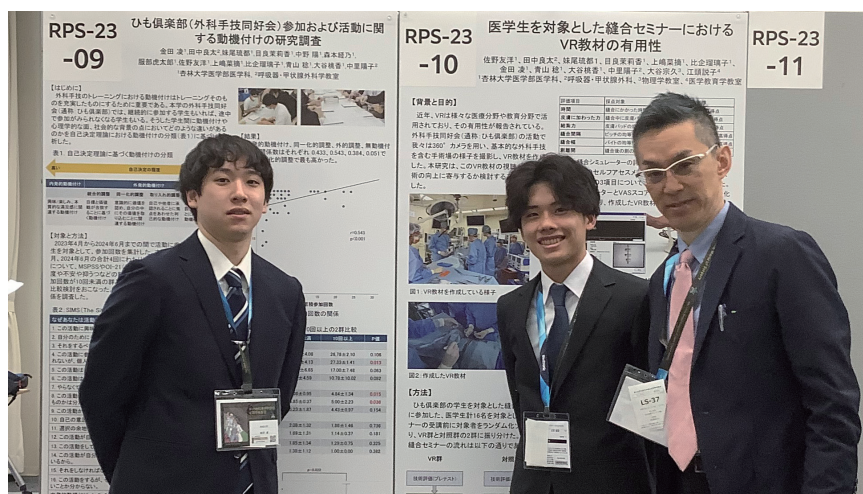
なお、解剖実習体の死後 CT/MRI 撮影 (オートプシー・イメージング) は、本学保健学部診療放射線技術学科 山本智朗教授のご協力のもとで実施しております。

受賞した佐久間さんは、「学生のうちにこのような学会に参加できたこと、大変嬉しく思いますし、すごく貴重な経験になりました。受賞できたことで、自分の力に対して、より一層、自信が持てるようになりました。これからもプレゼン力を向上させたいと強く思っています。このような機会を与えてくださってありがとうございました。」と述べています。

これからも多くの学生が学会発表にチャレンジすることを期待しています。

肉眼解剖学教室

M4 佐野さん、M6 金田さんが外科学会でポスター発表



左から金田凌さん、佐野友洋さん、指導教員の田中良太准教授

第125回日本外科学会定期学術集会（会期：4月10日-12日）が仙台国際センターで行われ、医学部の発表セッションにおいて4年生の佐野友洋さんと6年生の金田凌さんがそれぞれポスター発表を行いました。佐野さんと金田さん、指導教員の田中良太准教授からのひと言を紹介します。

医学部4年 佐野友洋 テーマ：「医学生を対象とした縫合セミナーにおけるVR教材の有用性」

私は入学前から外科に強い関心を持ち、入学早々ひも倶楽部に参加して外科手技の習得に励みました。我々はその活動の中で、医学教育でも活用が進んだVR教材に注目しました。研究計画の立案から約3年間もの歳月をかけ、VR教材の作成およびその教育効果の検証を行い、今回の発表に至りました。発表当日は緊張もありましたが、入念な準備の甲斐もあって、自信をもって臨むことができました。本研究を通して、多くの学びを得ることができました。ご指導・ご支援をいただいた田中先生をはじめとする多くの先生方や先輩方に、心より感謝申し上げます。

医学部6年 金田凌 テーマ：「ひも倶楽部参加および活動動機に影響を与える心理的要因の実態調査」

この度第125回日本外科学会学術集会で、外科手技同好会（通称：ひも倶楽部）でのOff-JT (Off the job training) への参加および参加動機に関する研究について発表させていただく機会を賜りました。心理学的な要素も強い研究であったことから初見の方々に制限時間4分でわかりやすく伝える、パッとみてわかるようにする等、聞き手の立場に立って準備することは大変苦慮いたしましたがこの経験が何物にも代えがたい経験となりました。発表後は他大学の先生方からも建設的なご意見をいただき今後の糧としていきたいと思っております。最後にご指導いただいた田中先生、ご助言いただきました本学呼吸器・甲状腺外科学の先生方にこの場をお借りして御礼申し上げます。

医学部呼吸器・甲状腺外科学教室 准教授 田中良太

佐野友洋 君と金田 凌 君の日本外科学会での発表テーマは、ひも倶楽部の活動を通じて生まれてきた彼らのアイデアからです。佐野君の研究は本学に導入されたVR機器の有用性を検証するもので、医学教育におけるVR教材のあり方に対して示唆を与える内容でした。金田君の研究はひも倶楽部への参加動機を行動心理学に基づいて詳細に分析したものです。医学生のモチベーションに関連した内容で、指導者の私にとっても大変興味深い結果となりました。お二人ともコツコツと努力した結果が、今回の学会での成果発表へと繋がったと思います。これらの経験はお二人の将来にきっと役に立つものと信じています。

2025 年度 新入生オリエンテーション

オリエンテーション室室長 生物学 栗崎 健

今年も、フレッシュな新入生が医学部に入学してきました。4月5日から8日までの入学式を挟んだ3日間、新入生オリエンテーションを開催いたしました。医学部長・教務部長・学生部長のお話、学生同士の自己紹介、学生会主催のクラブ・学生活動紹介、グループワーク、学生相談室案内、ハラスメント防止、UNIPAの使い方、先輩医師と医学教育学教室からの激励、赤木先生による医師のプロフェッショナルリズムについて講演など、盛りだくさんのプログラムに取り組みました。新入生はさぞ疲れたことと思いますが、最終日にラーニングコモンズで開催された親睦会では、昨年以上の盛り上がりを見せてくれました。学生生活の良いスタートを切るための良い準備となったのではないのでしょうか？

オリエンテーションの中で恒例となっているグループワークは、新入生にとって最も印象に残るプログラムではないのでしょうか？このプログラムでは、「良き医師とは」という課題で、自分たちがこれから目指す理想の医師像について、グループに分かれて、KJ法という発想法を用いて議論します。「どんな医師になりたいか」、言葉にして話しあう機会はなかなかないと思いますが、新入生たちは各々の思いを、このグループワークを通してこれから学びを共にする仲間たちと話しあいます。短時間で全員の意見をポスターにまとめて発表するという作業は、難易度が高いように思いますが、年々その技術は向上しているように思えます。質疑応答ではマイクを向けるとみな良いコメントで会を盛り上げてくれます。毎年このグループワークを見ていると、新入生たちの希望に溢れた思いを感じることができ、「今年も良い新入生が入学してきた」との印象を抱かずにはいられません。入学した時のこのピュアーで熱い思いを忘れずに新入生には自分たちの夢に向かった邁進して行ってもらいたいと思います。新入生の皆さんのこれからの活躍を大いに期待しています。

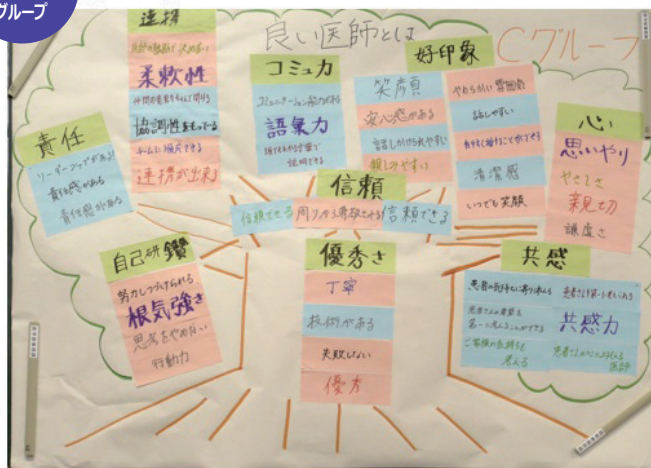
A
グループ



B
グループ



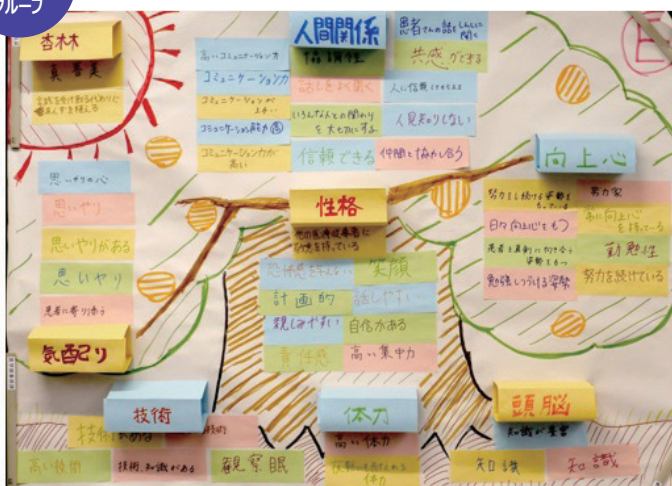
C
グループ



D
グループ



E
グループ



F
グループ



G
グループ



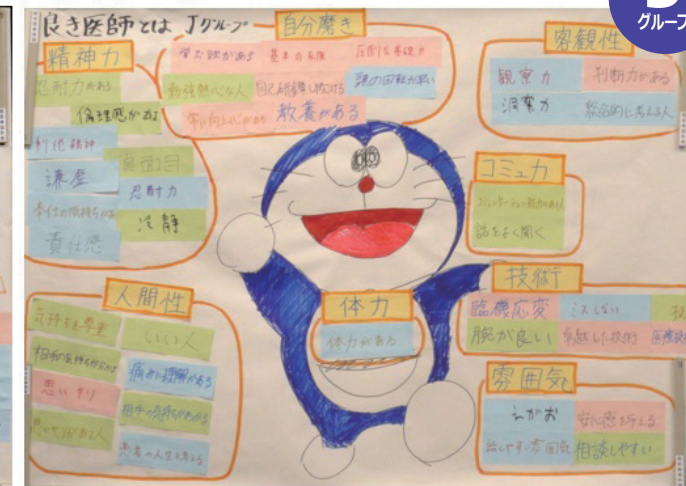
H
グループ



I
グループ



J
グループ



K
グループ



L
グループ



M
グループ



N
グループ





17

おわりに

医学部 56 期生の皆様、ご入学おめでとうございます。本号に登場するように、先輩たちも医学部での多くの学業とともに、自由研究やスポーツに参加して、様々な体験をしています。忙しいことを理由に試験に通ることだけを考えて受け身になっていると、何のために学習しているのか、初心を忘れてしまいます。忙しいからこそ、自分自身でやりたいことの計画を立て、毎日の過ごし方を大切にして、一つ一つの予定をこなしていくと道が開けていきます。同期を大切に、充実した医学部生活を過ごしてください。

市村先生の連載では、先月号から外国生活ならではの味わえる世界観や異なる文化の接触が描かれています。前号ではクリスマスでの Peter 教授のヨーロッパ流のもてなし、スウェーデンの暗く陰鬱な冬と極端な夏に影響される文化や人柄、そして本号で、大学院生 Esther との交流で感じたドイツ人あるいは信心深いクリスチャンならではの考え方や文化の違いなど、市村先生が研究ばかりでなく、留学経験で世界観を広げていった話題で興味深いです。

高齢医学会理事長の神崎教授にもご寄稿いただきました。高齢化社会における「病気と上手に付き合っていくための医療」について考えさせられます。

今年度も、多くの皆様からのご寄稿をお待ちしております。よろしくお願いします。

平形 明人